

月刊

2017

1
月号

みんぱく



特集

と
り



鳥と人とのかわり 卯田宗平 / 歌を運ぶ鳥ガルダ 立川武蔵
教会の鳥たち 菅瀬晶子 / 鳥の声を愛でる人たち 西山文愛
シジュウカラ語を解き明かす 鈴木俊貴 / ガマや鳥とともに、過去への旅へ ピーター・J・マシウス

鳥好き

我が家では、オカメインコとヨウム（中型オウムの一種）を飼っています。

「でも鳥って怖くないですか？目が真っ黒でクチバシ尖ってるし、足なんか恐竜みたいでツメも鋭いし怖くない？」とか言う人多いと思います。僕も幼稚園の時に『ミー』と『ケイ』という文鳥を飼っていましたが、すばしっこくて、すぐ囀んでくるし、挙げ句の果てに団地のベランダから逃げてしまった……。という経緯から何か好きになれなかつたんです。

でも二九歳で結婚する時、嫁さんと一緒に、彼女が小学校五年生の頃から飼っているという、オカメインコの『サーちゃん』がやって来ました。最初は怖かったのですが、愛らしい顔、フワフワした触り心地、そして独特の体臭（何とも説明できない、野性味のある粉っぽい臭い……）。造形的にも軽量の割に豊かな立体感、羽の展開や尾羽の美しさなど、見た目もさることながら、犬のような主人に従順な部分と、猫のような自

片桐仁

プロフィール
1973年生まれ、埼玉県出身。芸人、俳優、彫刻家。多摩美術大学卒業。1996年、コントユニット「ラーメンズ」を結成。舞台だけでなくドラマ、CMに出演するほか、造形への才能も発揮し、粘土細工の個展「片桐仁 感涙の大粉室展」粘土と締切と14年」などを開催。また、声優としても活躍しており「シャキーン」(NHK Eテレ)でジュモコさんを担当。

由奔放さを併せ持つ、スーパーペットであることに気がきました。その後、喋る鳥が欲しくなり、ヨウムの『ウロコ』を衝動買いしまして(二〇〇四年)、今年から亡くなったサーちゃんとソックリなオカメインコの『うめ』を飼っています。

民博に行くと、〃鳥顔〃の精霊や神様が世界中にいたことがわかります。中でもアマゾンの、本物のコンゴウインコの羽を貼り込んだお面は、スゴかったです。「現地では、お面や衣装で使うためにコンゴウインコを飼っている」という、お話も面白かったですね。自らの羽で空を自由に飛ぶという、人間には不可能な能力を持った鳥が、神になるという図式は分かるんですが、それ以外にも〃何を考えているか分からない〃表情、人間と近い場所にいる親しみやすさなども、そういう存在になった一因なんじゃないかしら？

なので、この鳥にまつわる展示イベントをキッカケに鳥に対するイメージが、より良くなると思いますね。

月刊 みんなぱく

1月号目次

1 エッセイ 千字文

鳥好き
片桐仁

特集 とり

- 2 鳥と人とのかわり
卯田 宗平
- 4 歌を運ぶ鳥ガルダ
立川 武蔵
- 5 教会の鳥たち
菅瀬 晶子
- 6 鳥の声を愛でる人たち
西山 文愛
- 8 シジュウカラ語を解き明かす
鈴木 俊貴
- 9 ガマや鳥とともに、過去への旅へ
ピーター・J・マシウス
- 10 〇〇してみました世界のフィールド
フランス国立映画センターのアーカイブス
園田 直子

12 みんなく Information

14 味の根っこ
ワイン
細田 和江

16 文化遺産おもてうら
宗教的文化遺産の保全と他者への寛容
——パキスタンより
野口 淳

18 手芸考
「刺し子」によるモダンからの脱却
蘆田 裕史

20 ながなんちゃ
女性の名前に込める次世代への願い
山田 洋平

21 次号予告・編集後記



特集

とり

鳥と人とのかわり

うだしきへい
卯田 宗平

民博 先端人類科学研究部

大阪モノレール万博記念公園駅からみんぱくまで、わたしの足で約一四〇〇歩。公園内をとる道すがら、毎日さまざまな鳥をみることが出来る。春にはカイツブリやカルガモが子育てをし、夏になるとカワラヒラやシジュウカラが水浴びをする。秋から冬にかけてはシロハラやツグミ、ジョウビタキなどが落ち葉をはねのけて小動物や木の実を探す。鳥をみながらの通勤も楽しいものである。

鳥が問う「人間とは何か」

日本で鶺鴒がおこなわれている場所には鶺鴒塚（鶺鴒養塔）が建立されている。各地の鶺鴒匠たちは、鶺鴒の最中に命を落としたウ類を埋葬し、鶺鴒養をおこなう。ウ類の冥福を祈る意味を込めて卒塔婆を立てるところもある。以前、わたしは中国で鶺鴒の調査をしていたとき、日本の鶺鴒養のことを中国の鶺鴒漁師たちに話したことがある。すると、彼らは一様に驚きの表情をみせ、異口同音に「そのようなことをしてどうなるのか」という。ウ類に特別な感情を抱いたり、死亡した個体を供養したりすること

二〇一七年の干支は「酉」。一般的にはニワトリが当てられるが、鳥類全体に視野を広げると、人とのかわりは多様である。大空を飛ぶ姿、色鮮やかな羽根、美しいさえずりに人はひかれ、さまざまな意味を込める。一方で、その生態については身近な種でさえまだわかっていないこともあるようだ。そんな「とりどり」のとりにもつわるお話をとりあげる。



水入れ容器。アメリカ合衆国 H0074886

日々の暮らしから精神世界まで

現在、地球上には一万種前後の鳥がいるといわれている。鳥はその分布域が広く、七大陸のすべてでみることが出来る。鳥と同じく地球上に広く分布するわたしたち人間は、各地に生息する鳥と深くかわりながら生きてきた。ときには、その肉を食べ、その声（め）を愛で、その羽毛を身につけ、その存在を伴侶にした。また、鳥を神の使いとみなしたり、靈魂を鳥に託して冥界に届けたりもする。

北アジアのシャマンのなかには頭部の衣装に猛禽類の羽毛を飾りつけるものもある。ヒンドゥー教では頭部がワシ、胴体が人間として描かれるガルダが神の鳥として崇拝されている。キリスト教では、新しい命のシンボルとして鶏卵にカラフルな色づけをする復活祭の慣わしがある。こうした鳥と



中国の鶺鴒漁師たちはカワウの後方から竹棒を大きく振りまわす。細くて長い棒を布がるカワウは前進速度を速める

の意味がわからないようであった。

では、中国の漁師たちのそうした態度や考え方をどのように理解すればよいのだろうか。もしかすると、鶺鴒をなりわいとすする漁師たちはウ類に対して深い思い入れをしない方がよいのかもしれない。中国の鶺鴒養では、一回の操業で二〇〇羽前後のウ類を同時に利用し、毎日六時間以上も漁を続ける。そんな彼らがウ類一羽一羽にうしろめたさや罪の意識を強くもっていたらどうなるであろうか。日々の鶺鴒養は成り立つて

あろうか。むしろ、鳥と人とのあいだに線を引き、ウ類は「魚を獲る手段である」と割り切って考える方が漁は維持できる、とも考えられる。

実際、日本の鶺鴒でもウ類に名前を付けない鶺鴒匠がいる。名前を付けてしまうと「情が入ってしまう」からである。彼らもまたウ類に特別な感情を持ち込まないようにしているのである。

どのような文化、地域でも鳥と人が同じ境界線で分断されているわけではない。それが明確なこともあれば、曖昧なこと、場合によっては境界線など存在しないこともある。この現代社会においてわたしたち人間はどのような態度で鳥たちと接し、いかなる関係を築いているのか。じつは、鳥を考えることは、わたしたち人間を考えることにつながるのである。



飼育されているカワウ。ひもでつながれていなくても逃げない

歌を運ぶ鳥ガルダ

たちかわむさし
立川 武蔵

民博 名誉教授

ことばの羽ガルダ鳥

ベツレヘムからメーラが来た。インド生まれの伝説の鳥ガルダについて書いてほしいという編集者からの依頼だった。このメーラはまさにガルダだと思っただ。ユダヤの神ヤーヴェはことばによって世界を創造したという。インドにおいてもことばはきわめて重要だ。そのことばに羽が生えて飛んでいくとインド人は考えた。ことばの羽あるいは「ことばを運ぶ鳥」がガルダ鳥である。

古代インドのバラモン僧たちは、彼らの聖典ヴェーダ（知識）は人間の作品ではなく、永遠なものだと信じていた。儀礼において僧たちはヴェーダの文句を神に対する讃歌として吟じながら、神々に供物を捧げたのである。古代の神々は讃歌と供物によって鼓舞され、人間たちの希望をかなえる存在であった。つまり、ヴェーダのことばこそが力あるものであり、世界の根本原理ブラフマン（梵）とよばれたのである。聖典ヴェーダを誦いあげる



トラナに見られるガルダ。カトマンドゥ

ことはバラモン僧たちのみに認められた特権であった。ヴェーダということばは鳥、つまりガルダである。そして、ヴェーダのことばは供儀を具現する神ヴィシュヌを運ぶ。ガルダ鳥がヴィシュヌを乗せて飛ぶ姿はまさにこのことをあらわしている。

ガルダ (Garuda) という名前は、動詞グリー（声を出す）および動詞デー（送る）の両者に由来すると考えられている。天界に住むヴェーダの神々に対して誦いあげられた声のイメージは、やはり羽のある鳥がふさわしい。すでに紀元前二〜九世紀の編纂の『リグ・ヴェーダ』にはガルダの前身と思われるガルトマンの名前が見られるが、この神は世界を照らす太陽光線とも同一視された。



ヴィシュヌを運ぶガルダ。カトマンドゥ

蛇をとらえるガルダ鳥

またガルダは蛇をとらえる鳥として知られており、捕まえられた蛇がそれぞれの足からぶら下がっている図がしばしば見られる。ガルダが有する蛇は時間（カーラ）を象徴する。ネパールなどの寺院の扉上部には半円形の装飾（トラナ）がかけられるが、その頂上にはガルダが見られる。ガルダの足からは二匹の蛇が半円の外周に弧を描いて垂れ下がる。この蛇は宇宙創造の際、まだ混沌状態にある世界を囲む最初の蛇（ウロボロス）である。この最初の蛇は時間と関係している。

ガルダは神を運ぶ知識であり、世界・時間を握る存在である。ガルダは日本ではカラス天狗となったというが、インドのガルダに比べると規模が小さい。天狗は、そろそろお山から降りてきて、ガンバッテホシイ。

教会の鳥たち

すがせあきこ
菅瀬 晶子

民博 研究戦略センター

鳥をかたどる

私事になるが、学生時代から今に至るまで、インコを飼っている。調査に出るときは当然連れてゆく訳にもいかず、友人に預けることになるので、さみしさを感ずることもしばしばだ。しかしさいわいにも、調査地で鳥に出会う機会は意外と多く、そんな鳥たちに慰められている。なにも生きた鳥とは限らない。中東のキリスト教徒をおもな調査対象としているわたしにとって、教会で鳥をかたどった装飾と出会うこと



聖墳墓教会内のレリーフ。聖杯にかしづくクジャクたち

は、大きな愉しみだ。

例えば、聖地エルサレムの象徴的存在のひとつであり、全世界のキリスト教徒が生涯に一度は巡礼したいと熱望する、聖墳墓教会。この教会内部の、イエスが磔刑に処せられた場所にある礼拝所のモザイクが近年修復されたが、そのなかにもたくさんの鳥たちを見つけることができる。いうまでもなく、彼らはいずれも宗教的な象徴性を帯びた存在だ。キリスト教においてもっとも重要なのは、聖霊の象徴としてあらわされるハトだが、一般にはむしろ、オリーブの枝をくわえた平和の象徴としてのハトのほうが、ひろく知られている。また、胸を裂いて流れるおの血でヒナを育てるペリ

不滅と復活の象徴

カンは、イエスの受難と自己犠牲の精神をあらわしている。実在ではなく想像上の鳥ではあるが、炎のなかに立つフェニックスは、イエスの復活の象徴。古代エジプトやギリシャ・ローマの時代から、不死を司る聖鳥として語り継がれ、レバノンやエジプトなどに住まうとされてきた。フェニックスの語源は、地中海の覇者として君臨した古代レバノンの海洋民族、フェニキア人と同じであるという説もある。

聖墳墓教会の内部には、中東に教区をもつ正教とカトリックの諸教会がそれぞれ礼拝所をもっているが、そのなかでもアルメニア正教が管轄する場所では、クジャクの装飾が目を引く。クジャクは魂の不滅を象徴し、第一次世界大戦中にアナトリア半島からエルサレムに移住したアルメニア人が作る陶器でも、好んで描かれる。クジャクはアルメニア人以外でも、イラクやシリアに住むヤジディーとよばれる人びとにとって象徴的存在である。ヤジディーはゾロアスター教やアブラハム一神教など、中東で誕生したさまざまな宗教の要素が混ざり合ってきた特殊な宗教を信じており、

帰国したわたしを迎える愛鳥菊次郎



クジャク天使（マラク・ターウース）という聖なる存在を崇めている。彼らが非ムスリムとしてイスに迫害されていることは、すでにご存じの方も多いだろう。

鳥そのものではないが、教会でみかける鳥に縁の深いものとしては、ダチヨウの卵が挙げられる。生命と復活の象徴として、天井からつり下げられていることが多い。復活祭の時期の風物詩、イースター・エッグもまた同じく、生命と復活の象徴である。学生時代に留学中、インコ恋しさが募っていたときにこのダチヨウの卵を見かけ、イースター・エッグ風チヨコとモール細工のひよこを買いたってしまったのは、今となってはちよっと笑える思い出である。



聖墳墓教会内のモザイク。オリーブの枝をくわえたハト

して、自慢の愛鳥を介した交流の様子を頻繁に見かける。そして、路地や住宅街で少し耳を澄ませば、小鳥の鳴き声が頻繁に聞こえてくるのだ。

さえずりコンテスト

週末の朝七時半になると、数個の鳥かごにお手製のカバーをかけ、バイクや車の荷台に積んだ人たちが静かな公園に集まり始める。競鳴会に参加するためだ。

競鳴会ではおもに、求愛や威嚇のときに



審査の開始まで、カバーをかけられたまま待機する小鳥たち

鳥の声を愛でる人たち

にしやまふみえ
西山文愛

総合研究大学院大学博士課程

鳴き声が聴こえる

「トウトウ・トウトウトウ」

マレーシア北部に位置するコタバルで、住宅街の路地を歩いていると、聴きなれた鳥の鳴き声が聴こえてきた。鳴き声をする方向に耳を澄ませながら、歩み寄ると、色とりどりの布をかけた鳥かごの連なりが見えてくる。さらに鳥かごのながが見えるくらいまで接近すると、そこにはチヨウシヨウバトがひとつの鳥かごに一羽ずつ飼育されていた。

わたしの調査地であるマレーシアでは、小鳥の声を愛で鳴き声を競い合わせる「競鳴会」が頻繁におこなわれている。小鳥は飲食店の店内や、家の軒先で飼育されており、マレーシアの街や住宅街を出歩いた際に、よくよく耳を澄ましてみると、小鳥たちの鳴き声が聴こえてくる。

このようなさえずりを愛でる愛鳥飼育は

雄鳥が歌う旋律のような「さえずり」を競い合う。マレーシアでは、ハト科のチヨウシヨウバトとカノコバト、ヒタキ科のアカハラシキチヨウ、シキチヨウ、ヒヨドリ科のコウラウンの競鳴会が頻繁におこなわれている。そのため、軒先で見られる鳥もほぼ、この五種である。また、鳥の種類によって、鳥かごの造形が異なるので、遠くから鳥かごを見ただけで、飼育している鳥や競い合っている鳥の種類を推測できる。

競鳴会のルールは、鳥の種類と、さらに地域にも若干異なるのだが、飼育者は、健康的で美しい鳴き声を奏できるように愛鳥のトレーニングをする。その様子は、さながらコーチと選手のような関係だ。

飼育者たちは、その日までに大事に育てた愛鳥のかごを審査台のポールにひっかけて、審査員たちの審査を二、三時間静かに見守る。そのときに、飼育者は、もってき



チヨウシヨウバトの鳥かごカバー



競鳴会に参加するため、朝7時ごろから鳥かごをもって続々と集まる

現在、マレーシアに限らず、シンガポール、タイ、ブルネイ、ベトナム、中国、香港などといった、東アジア、東南アジアの比較的広い範囲で人気がある。中国からの影響が強いと思っていたのだが、マレーシアの競鳴会では、マレー系ムスリムの参加者が多く、華人の参加者は少数だった。軒先で小鳥を飼育していた家もマレー系の住宅が多いのが特徴だ。

そして、都市部や農村部を問わず、民家の軒先や飲食店で小鳥を飼育している様子や、飼育者同士が公園などに鳥かごを持参

たすべての愛鳥を出場させるわけではなく、コンディションがベストな子たちを会場で選出し大会に出場させる。審査がおこなわれているポールの横には、その日出場できなかった補欠の鳥かごが連なり、いつか来る自分の出場を今か今かと待っているかのように見えた。

公園には、選手も補欠も含めて数百羽の小鳥たちの鳴き声が響き渡っている。それを静かに見守るコーチたち。これが、マレーシアの週末の朝に繰り広げられている光景である。

みんぱく展示場内のさえずり

さて、みんぱくの本館展示場で「バードウォッチング」をしてみると、さまざまな地域の鳥の羽根を使った装飾品や、描かれた鳥に出会うことができる。じつは、鳥と虫の鳴き声が聴こえてくるスポットがあることをご存知だろうか。それは、西アジア展示と音楽展示の境目に立つと聴こえてくるのだ。音楽を再生する機械が無い時代に、鳥の鳴き声はひとつのメディアだったのかもしれない。小さな小鳥のメロディを競い合う、不可思議な交流が、今もなお、東・東南アジアの広い地域で活発におこなわれているのだ。



マガモとガマがあしらわれた飾り皿(アメリカ合衆国、1930年)

シジュウカラ語を 解き明かす

鈴木 俊貴

京都大学生態学研究センター機関研究員

言語をもつのは人間だけである——これが言語学者や動物学者の常識だった。しかし、最近の研究で、野鳥の一種シジュウカラが、「単語」や「文法」を用いて仲間とコミュニケーションをとっていることがわかってきた。

シジュウカラの単語

シジュウカラはスズメほどの大きさの小鳥で、宅地や公園でもよくみられるとても身近な存在だ。本種は春先、樹木にできた空洞(樹洞)に苔を運んで巣をつくり、一夫一妻で繁殖する。ヒナはおよそ七〜一〇羽。親鳥から青虫をもらい、三週間ほどで親顔負けの大きさにまで成長する。樹洞のなかとはいえ、けっして安全なわけではない。時折、カラスがやってきて、入り口からヒナをつまみだし、食べてしまうことがある。また、ヘビは樹洞に侵入し、ヒナたちを丸呑みにする。



巣箱のなかでうずくまるヒナたち

親鳥は、巣に近づくカラスやヘビをみつけると、繰り返し鳴き声を出して騒ぎ立てる。このような鳴き声は他の鳥でも知られるが、長いあいだ単なる「叫び声」であると考えられてきた。しかし、わたしの一連の研究から、この声は天敵の種類をヒナに伝える「単語」であることが明らかになった。

シジュウカラの親は、カラスをみつけると「チカチカ」と鳴く。この声を聞くと、ヒナたちは樹洞のなかで、カラスの嘴が届かない位置でうずくまる。一方、親鳥はヘビをみつけると「ジャージャー」としわがれた声を出す。これを聞くと、ヒナたちは一斉に樹洞を飛び出す。ヘビが侵入してくる前に、巣を脱出することで、捕食を回避できるのだ。つまり、「チカチカ」はカラスを、「ジャージャー」はヘビを示す声だといえる。

シジュウカラの文法

シジュウカラは秋から冬にかけて群れをなして生活するが、そのなかでもさまざまな音声を用いて情報を伝え合う。群れの仲間に危険を知らせる際は「ピーツピ(警戒しろ)」と鳴き、仲間を呼ぶ際には「チチチチ(集まれ)」と鳴く。しばしば、仲間とともに協力してフクロウやモズなどの天敵を追い払うことがあるのだが、その際は「ピーツピ・チチチチ」と組み合わせる。これは「警戒しながら集まれ(そして、ともに天敵を追い払おう)」という文であるといえそう。

この音声の組み合わせには規則がある。「ピーツピ・チチチチ」と組み合わせるが、「チチチチ・ピーツピ」とは発さない。実際に、正しい語順の音声をスピーカーから再生して聞かせてみると、シジュウカラは天敵を追い払うときと類似の行動(警戒しながら音源に近づく)で反応する。一方、語順を逆にした合成音を再生すると、これらの反応はみられない。つまり、シジュウカラは語順を正しく認識して、文の意味を解読していると考えられる。

このように、シジュウカラにもある程度の言語能力が備わっていることがわかってきた。他の鳥たちにも同様の能力があるのかは未だ明らかではないが、鳥類の音声研究はわたしたち人間の言語の起源を探るうえでも大きな鍵を握っているといえそう。

ガマや鳥とともに、 過去への旅へ

ピーター・J・マシウス
民博 民族社会研究部

水鳥たちの憩いの場
アメリカ英語でキャットテイル(猫のしっぽ)とよばれているガマ(学名Typha sp.)は、世界中の湿地帯でよくみられる、背の高いア

シの一種である。湿地帯を描いた絵画には頻りに登場するが、それはおそらくその特徴的な穂によるのだろう。暗褐色から赤褐色の穂が弾けると、幾千もの小さな種がまき散らされ、風に運ばれてゆく。この種が着水すると、水底に沈んでゆき、泥のなかで発芽する。ガマは小川の岸辺や湖岸に旺盛に繁茂し、まっすぐに生える葉は水鳥たちに安全な憩いの場を提供する。枯れた葉は、彼らの巣材にもなる。

先日、京都で開催された第八回世界考古会議のサテライトイベントで、わたしはガマを表現したり、ガマそのものを使ったりした工芸品を展示した。ガマと湿地に生きる鳥たちを表現した芸術家もたくさんいた。ガマや水辺の植物には、水鳥がつきものだ。それは今も昔も、カモ猟のハンターたちにはおなじみの風景である。

人にも動物にも

多様な自然環境で生育し、ひろく利用されてきたことから判断すれば、ガマはおそらく、人類がもっとも早くに利用しはじめた植物のひとつであろう。しかしながら、この説を裏付けるには明確な証拠が少なすぎる。ガマの

繊維やガマから作られたものが、遺跡から出てくることは概してまれである。繊維が残存しないのは、ガマという植物の基本構造ゆえである。ガマの葉は空洞で、根の部分にまで酸素が行き渡り、植物全体をおって沼気(おもにはメタンガス)が泥から空気中に発散されるようになっていく。この構造ゆえに、ガマは水中に生えることができるのだ。空洞な葉はやわらかく、触れるとあたたかい。マットや雪ぐつ、かご、それにもちろん水鳥の巣がガマで作られてきたのは、じつにもっともな話なのである。

展示期間中、ガマについてさらにいろいろな話をきいた。種子島からきたある考古学者によれば、ガマのやわらかい、ふわふわした冠毛は、近代以前の日本で防寒具の中綿として使われていたそう。太平洋戦争時には、羊毛の代用品として使われていたという。因幡の白ウサギがガマの穂に寝そべったというのは、傷ついた肌を癒やすためだけではなく、じつは剥がれた毛皮のかわりにするためだったのではなからうか。ガマの種とともに水面を漂い、あるいは白鳥の背でくつろぎながら過去へとさかのぼり、ガマという植物が幾千の時の流れのなかでどのように使われてきたのか、この目で見てみたいものである。

(翻訳・菅瀬晶子)

〇〇してみました世界のフィールド

フランス国立映画センターのアーカイブス

そのだ なおこ
園田 直子
民博 民族社会研究部



1パリを囲む要塞に入ってみました

セーフティーフィルムを収蔵する建物の内部。筆者の横は、CNCアーカイブスのエリック・ルロワ氏（撮影・大森康宏）

1870年の普仏戦争の教訓から、パリの周辺にはその後、多くの要塞が造られた。そのうちのひとつ、パリ南西20キロメートルのボワ＝ダルシーには、1969年、ときの文化大臣アンドレ・マルローにより国立映画センター（CNC）のアーカイブスが作られた。

フィルムをまもる

国立映画センター（CNC）のおもな業務は、フィルムの収集（国家への納品、寄贈、購入など）、目録作成、保存、修復であり、近年はデジタル化に力をいれている。センターは、ドキュメンタリー、フィクション合わせて二万点のフィルムを所蔵しており、「このうち「ルミエールの映画」のオリジナルフィルムは二〇〇四年にユネスコの記憶遺産に登録された。

フィルムの素材には、ニトロセルロース、アセテートセルロース、ポリエチレンテレフタレート（ペットボトルと同じPET）などがある。

センターのニトロセルロースフィルムのコレクションは世界でも五本の指に入る（ヨーロッパでは「二をあらそう」規模ということである。ニトロセルロースは爆発・燃焼の危険性を伴うため、温度八度、相対湿度二五パーセントに厳格に管理



ボワ＝ダルシーの要塞にある国立映画センター（CNC）アーカイブスの入口

されたコンクリート製の専用保管庫に小分けされている。外気温が三〇度を超える日は、保管庫からフィルムを取り出すことはしない。各保管庫にはそれぞれ出入口が一方所設けられており、万が一の場合にはどちらからでも避難できるようにしてある。また、天井には炎を逃がすための窓、ドアの下には空気が入替える隙間が設けられている。ニトロセルロースフィルムの保管庫は二四時間体制で監視されている。

デジタル化の要望が出たフィルム、あるいは広報普及のために選ばれた作品である。なお、センターではこのほか、映画制作者からの申請をもとに、映像文化遺産のデジタル化助成をおこなっている。一三名の委員で構成される委員会が助成の可否を決定しており、企業の規模によっては、デジタル化は無償でおこなうとのことだった。センターで実施するデジタル化は、保存修復と対となる活動である。研究者や専門家に活用してもらうため、広報普及と利用するためのデジタル化といえる。

施設の説明をしてくださったエリック・ルロワ氏は、何度も「フィルムへの復帰」の原則ということばを口にしてきた。例えば修復後のフィルムは必ず三五ミリのセーフティーフィルム（PET）に移しかえて保存しているとのことだった。デジタルデータは、データを納める媒体の寿命からたえず移し替えが必要

となる。一方、フィルムは適切な温度・湿度環境で保管すれば、PETならば五〇年もつといわれるように、その寿命ははるかに長いからだ。今は、デジタルポールの映像の時代である。それでも、いやそれだからこそ、フランス国立映画センターではモノとしての映像を保存するために、アナログフィルムへの回帰が選ばれている。



手前の出入口からみたニトロセルロースフィルム専用保管庫の内部。奥に、ふたつめの出入口がみえる（撮影・大森康宏）

が進んでいるため、フィルムのコピーは最大三セットに限定し、過剰分のフィルムを整理することであらたな収蔵スペースを確保している。ちなみに、CNCでは、ニトロセルロースフィルムは赤色、セーフティーフィルムは緑色の容器に入れ、ふたの色はポジフィルムでは白色、ネガフィルムでは黒色と区別している。

デジタル化とフィルムへの復帰

七〇〇本以上のフィルムのデジタル化が終了しており、これらは研究者や専門家に公開されている。デジタル化されるのは、劣化の進んだフィルム、権利承継人から

★
フランス、ボワ＝ダルシー



中央の建物がセーフティーフィルムの収蔵庫。ひとつの建物には、12万巻のフィルムが収蔵できるという

開館40周年記念特別展

「ピース—つなぐ・かざる・みせる」
飾り玉、数珠玉、トーンボ玉などを総称するピース。本展示では、私たち人類が作り出した最高の傑作品の一つとしてピースをとらえてつくる楽しみ、飾る楽しみをおして日本や世界の人びとにとってのピースの魅力を紹介いたします。

会期 3月9日(木)～6月6日(火)
会場 特別展示館



首長用 足のせ台(カメルーン)

企画展
「津波を越えて生きる」
大槌町の奮闘の記録」
岩手県大槌町の被災前の文化を紹介すると同時に、被災直後の人びとの行動や復旧の試みを展示の形でとりまわります。将来起こりうる大規模災害に対する備えの必要性を示し、災害を乗り越えて過去から未来へと文化や伝統をつなぐことの意義を考えます。
会期 1月19日(木)～4月11日(火)
会場 企画展示場

年末年始展示イベント「とり」
2017年の干支をテーマに、みんなく所蔵の資料や写真を展示し、世界各地の「とり」を紹介いたします。
会期 1月24日(火)まで
会場 本館ナビひろば

■関連イベント
「みんなくでバードウォッチング」
マップとともに、展示場にいる「とり」を探します。マップに掲載のクイズに解答された方には、参加賞を贈呈します。
日時 1月9日(月・祝)
10時～17時16時受付終了
受付場所 本館エントランスホール
会場 本館展示場

※当日随時受付、先着350名、参加無料(当日は無料観覧日です)
日は無料観覧日です)

ギヤラリートーク
日時 1月9日(月・祝)
①11時～11時30分、②14時30分～15時
会場 本館ナビひろば
講師 卯田宗平(本館准教授)
※申込不要、参加無料(当日は無料観覧日です)
アイヌ展示チアシリカラ! (アイヌの展示をリニューアルしました) — 冬のみんばくフォーラム2017
工芸、音楽などさまざまな分野で、伝統をへー

スにしつつ新しいアイヌ文化が生まれています。伝統を継承しながら、新たな文化を創造する人びとの姿を、イベントをおして紹介します。
■関連イベント
アイヌ・アートにふれる日～木彫の可能性～
アイヌの文化展示場に作品を展示している作家を迎え、木彫の実演や作品の解説をおこないます。小さな展示コーナーも設ける予定です。
日時 2月4日(土)、5日(日)
11時～16時
会場 本館エントランスホール
作家 貝澤徹(木彫家/北の工房つとむ)
藤戸康平(木彫家/熊の家・藤戸)
※申込不要、参加無料

展示場クイズ「みんなく」
アイヌの文化編
1月24日(火)まで

学術潮流サロン
「人と動物—つながりとその変化」
人間と非人間の関係性にまつわる議論が注目されている近年の潮流を考慮に入れ、人間と動物とのつながりについて理解を深めることを目的とします。
日時 1月20日(金)13時30分～17時(13時開場)
会場 本館第6セミナー室(定員30名)
※要事前申込、参加無料、先着順

みんなく映画会
第36回ワールドシネマ
「幸せのありか」
ポーランドが民主主義へと移行していく1980年代、知的障害があるが感受性の豊かな少年マテウシュが、自分の感情を家族に自由に伝えられないまま、さまざまな経験を通して成長していく様子をえがきます。
日時 2月11日(土・祝)
13時30分～16時30分(13時開場)
会場 本館講堂(定員450名)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
※入場整理券を当日11時から本館2階観覧券売場にて配布
連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル—展示キュレーションの誘惑—新しいみんなく」
本館の研究者が、展示という作業の醍醐味と魅力についてお話しし、展示キュレーションの世界へ誘います(全7回)。
時間 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1階
ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル

1月11日(水)
展示キュレーションの誘惑
新しい中央・北アジア展示ができるまで
展示キュレーションの誘惑
講師 藤本透子(本館准教授)
1月25日(水)
展示キュレーションの誘惑
新しい東南アジア展示ができるまで
講師 平井宗之介(本館教授)
お問い合わせ先
一般社団法人ナレッジキャピタル
06-63372-6530

●休館日、無料観覧日のお知らせ
年始は1月4日(水)まで休館します。1月9日(月・祝)成人の日は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合、入園料が必要です。
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第464回 1月21日(土)
アイヌ文化と観光
講師 齋藤玲子(本館准教授)



アイヌの工芸品販売や舞踊公演は明治・大正時代からおこなわれていました。かつては「文化を売り物にする」ことへの批判もありましたが、観光が文化継承を支えてきた面もあり、現在は経済的自立や文化発信の手段としても評価されています。歴史を踏まえて、さまざまな事例を紹介します。
※当日11時30分～12時、アイヌの文化展示場案内を開催(要展示観覧券)

みんなくウィークエンド・サロン
研究者と話す

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
ただし、8日、15日(日)は展示観覧券不要
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

1月8日(日) 14時30分～15時 本館第3セミナー室
アマノの聖人祭—在来文化の伝統とキリスト教の融合
講師 齋藤晃(本館教授)
1月15日(日) 14時30分～15時 本館第3セミナー室
日本の鵜飼文化は誰が守るのか
講師 卯田宗平(本館准教授)
1月22日(日) 14時30分～15時 本館企画展示場
東日本大震災の教訓
講師 竹沢尚一郎(本館教授)

カレッジシアター

「地球探究紀行」
みんなく教員が執筆した臨川書店発行「フィールドワーク選書」を中心に話しします。
時間 13時～14時30分
会場 あへのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円
共催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
1月11日(水)
タイワンインノシシを追う—調査で出会う食文化
講師 野林厚志(本館教授)
1月25日(水)
アンデスの聖地をめぐる
講師 八木百合子(本館機関研究員)
お申込み・問い合わせ先
ウェブ産経カレッジシアター係
06-66333-9087

刊行物紹介

■小長谷有紀・鈴木紀・旦匡子 編
『ワールドシネマ・スタディーズ』
—世界の「いま」を映画から考えよう—
勉誠出版 2,200円



みんなくワールドシネマで上映した映画など39作品から、国境問題、移民の増加と排斥、家族間のコミュニケーション、支援と共生、ジェンダーギャップなど、現代社会の抱える問題を考察。文化や立場の違いを越えて、さまざまな人間同士が共生できる社会のあり方を考えるための「本で読むワールドシネマ」。

友の会

友の会講演会 (大阪)

会場 本館第5セミナー室(定員96名)
※当日先着順、会員証提示(会員外500円)
第463回 2月4日(土)13時30分～14時40分
世界各地のイスラーム
—みんなくでその広がりを考える—
講師 山中由里子(本館准教授)
ユダヤ教、キリスト教に続いて、中東に誕生した一神教イスラーム。現地ではこれらの宗教が共存する一方で、遠征や交易、布教活動、移住により、イスラームは世界各地に広がりました。ひと口に「イスラーム」といっても、歴史・地理的要因により、世界のムスリムの暮らしのあり方はさまざまです。観光、留学、就労、結婚、改宗などによって在日ムスリムも増えています。みんなくの展示や教材をヒントに、世界各地のイスラームについて考えてみましょう。
第464回 3月4日(土)13時30分～14時40分
パキスタン北西部の異教徒 カラーシヤ人
講師 吉岡乾(本館助教)
●両講演会とも、終了後に講師を囲んで懇談会をおこないます。

東京講演会

第116回 1月9日(月・祝)13時30分～14時40分
「新」アイヌの文化展示関連
「アイヌ・アート」をもっと身近に
—イラストレーションから踊りまで—
ゲスト 小笠原小夜(アイヌ文化交流センター非常勤職員、イラストレーター)
講師 齋藤玲子(本館准教授)
会場 アイヌ文化交流センター(定員60名)
※要事前申込、無料(会員は会員証提示)
●講演会終了後、解説付きの見学会をおこないます。
第117回 2月25日(土)13時30分～14時40分
異文化が交差する物語
—アラビアンナイトからのぞく中東世界—
講師 西尾哲夫(本館教授)
会場 モンベル御徒町店4Fサロン(定員60名)
※要事前申込、会員無料(会員証提示)、一般500円
●講演会終了後、講師を囲んで懇談会をおこないます。

味の根っこ

イスラエル、ユダヤ人も楽しむ

ワイン

ほそだ かずえ
細田 和江

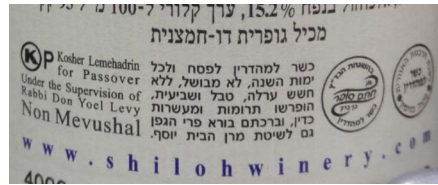
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任助教



スーパーのワイン売り場。すべてイスラエル・ワイン

火を入れたワイン

さて、イスラエルのワインのなかには、「ユダヤ教徒が口にしても良い」という印「コシエル」認定されたものがある。ワインがコシエルに認定されるには多くの規定をクリアしなければならぬ。生産から配膳にいたるまでを敬虔なユダヤ教徒が担うことを求められている。それは開栓などで異教徒が触れてしまっても「聖性」は失われてコシエルではなくなる。そこで、メブシャル(=煮沸した)という処理がなされたワインが登場する。メブシャルというのは、文字どおりワインの醸造過程で一度加熱処理することであり、当然、熱すればアルコール分がとんでしまう。その昔、自分たちが造った聖なる飲料を異教徒の手に捧げられることを嫌ったユダヤ教徒たちが「あえて味を落とすために」火を入れたことからはじまったもので、こうした処理により神のためのワインとは別のものと認識され



ワイン瓶のコシエル・マーク(米国、イスラエルの認定)。ちなみにこれはノン・メブシャル(Non Mevushal)と表記されている

は別のものと認識され非ユダヤ教徒が触れてもコシエルであり続ける。科学技術の発展によって、瞬間的に熱を入れた後すぐに冷却する方法が確立し、今ではその味わいはほとんど変わらないといわれている。ただし、ワインの魅力のひとつでも

ワイナリーが豊富なイスラエル

このところ日本でもイスラエルのワインを目にする人が多い。流通するのは大手ワイナリーの標準的なワインのみだが、味の評判はこのほか良い。

カフカスから地中海に到る地域は「ワイン発祥の地」といわれ、数千年前からワインを生産していた。ジョージア(旧グルジア)やレバノンには今でも古くからの製法を守っている生産者があり、地域固有のブドウを使って滋味溢れるワインを造り続けている。

それに比べると、イスラエルのワイン産業は極めて現代的である。固有品種のブドウではなく、赤ワインはメルロー、カベルネ・ソーヴィニオン、シラー、白ワインはシャルドネやソーヴィニオン・ブランなど国際的な品種のワインを幅広く生産している。それは、一九世紀末にヨーロッパからパレスチナに移民したユダヤ人開拓者が、入植の基盤作りとしてワイン造りを始めたからである。ポルドーに「シャトー・ロートシルト」を所有する仏のユダヤ人篤志家ロッチルド卿は、ワイン生産に不慣れな人びとのために機材や技術の支援をおこなった。このとき創立されたカルメル・ワイナリーは今もイスラエル最大のワイナリーとして業界を牽引している。このポルドー方式のワイン造りに、一九八〇年代、カリフォルニア・ワイン製造のノウハウが入ることで、イスラエル・ワインの品質は飛躍的に向上した。

ある長期保存による熟成には有効ではないよう、中級以上のコシエル・ワインにはこの処理はほどこされていない。

パレスチナ産のゆくえ

イスラエル産のワインがおいしいならば、パレスチナ産のワインはどうなのだろうか？二〇〇〇年前のパレスチナでは主要な輸出品であったワインも、地域がイスラーム化したことにより廃れ、その後はキリスト教修道院で、品質は二の次の典礼用ワインが細々と生産され続けてきた。それが二〇一三年、満を持してヨルダン川西岸の村タイベに新しいワイナリーが誕生し、嗜好品としてのワイン造りが本格的にはじまった。地元産ブドウを用いて丁寧に造られたパレスチナ・ワインがイスラエル・ワインとともに世界市場で流通する日は、意外に早くやってくるかもしれない。



タイベワイナリー。ホテルに隣接した小さなワイナリー



エルサレムで毎夏おこなわれるワイン・フェスティバル

火山灰質・赤砂質・石灰質など水はけの良い土壌が多いうえ、夏季に降雨がなく昼夜の温度差が大きいなどブドウの生育に適しているためか、四国ほどの広さしかないイスラエルに大小三〇〇ほどのワイナリーがある。街のスーパーやワインショップでは多くの国産ワインが並び、一五〇〇円から二〇〇〇円も出せば充分においしいワインが手に入る。じつは人が集まっても甘いものとコーヒードですますことの多いユダヤ人にとって、日常的にお酒を飲む習慣はあまりなかった。それでも生産量があがるにつれて、今では食事とワインを楽しむ人が増えている。

ワインに合うキュウリのピクルス(イスラエルではオリーブとともに定番のおつまみ)

※分量は、450mlのガラス瓶に入るくらい

キュウリ	小2本程度
塩	小さじ2弱
水	300ml
ブドウの葉	あれば
ディル	数束
ワインビネガー、なければ穀物酢	大さじ1
ローリエ	数枚
ニンニク	1、2かけ
粒こしょう	10粒
赤唐辛子(種を抜いたもの)	1本

- ① 瓶はきれいに洗って煮沸消毒しておく。
- ② 水に塩を完全にとかす(水と塩の量はお好みで。レシピの塩分は3パーセント)。
- ③ キュウリを瓶に立ててつめる。キュウリが大きい場合は瓶の高さに合わせてカットする(このときブドウの葉があれば先に入れる)。
- ④ ローリエ、ニンニク、粒こしょう、赤唐辛子、ディルをキュウリの隙間に入れる。
- ⑤ 酢を注ぐ。
- ⑥ ②の塩水をキュウリが浸るまで注いでからふたを閉め(あまりきつく閉めない)、ひっくり返して数回振る。
- ⑦ 常温で2、3日保存する(ある程度漬かったら冷蔵庫に移す)。



ピクルスの瓶詰め。キュウリのサイズ、塩味/酢味の違いで同じメーカーでもいくつかの種類が市販されている。缶詰も人気

※イスラエルでは7~8cmの小さいものを切らずに漬ける。大きさはお好みで。

宗教的文化遺産の保全と 他者への寛容

パキスタンより

野口 淳のぐち あつし

NPO 法人南アジア文化遺産センター理事・事務局長



文化遺産を受け継ぎ保全するとき、それが自分の集団や宗教、文化に属するものではない場合、どのように向き合えばよいだろう。この地を去ってしまった、あるいはまだ見ぬ「隣人」のために、できることは何か。

宗教コミュニティの対立と文化の破壊

異なる宗教コミュニティが隣接し、混在しているとき、ふとしたきっかけで生じた対立感情は、ときに相手集団の根絶を主張するほどに過激化する。増幅する憎悪は理性のたがを外し、性的暴行、生命を軽視した残虐行為へと至るだけでなく、相手集団の文化や伝統に矛先が向けられ、甚大な被害をもたらすこともある。近年では過激派組織ISの活動に起因して、特にイ

スラム教徒が宗教・文化遺産に対する攻撃や破壊を繰り返すというイメージが強まっているように思われる。

受け継がれる寛容性

筆者は、パキスタンにおいて考古学調査に従事してきた。旧英領インドの北西部にあたる同国では、今日では約一億八千万人の国民の九割以上がイスラム教徒である。

しかしそれはきわめて現代的な状況でもある。もともと旧英

領インドのなかでもイスラム教徒の比率が高い地域だったが、分離独立の際に、ヒンドゥー教徒、シーク教徒のほとんどが現インド側へ逃れた一方で、多数のイスラム教徒がパキスタン側へ流入した。現在の宗教集団の分布が形成されたのはわずか半世紀ちょっと前のことである。それ以前は、移り変わる支配者・王朝の下、異なる宗教コミュニティがモザイク状に分布していた。もちろん衝突も少なからずあっただろう。し

かし共生的な関係の方が長く続いていたと記憶され、記録されている。

分離独立後、パキスタン側には多数のヒンドゥー、シーク寺院が残された。旧主を失った宗教的文化遺産のうち少なからぬものが、ワクフ（共有の財産）として地域のイスラム教徒コミュニティの管理下となった。そのうちいくつかは今でも宗教施設のまま維持され、旧主である他宗教集団の巡礼を迎えているという。

たとえばハイバル・パフトゥンフワ州マンセーラ郡チッティ・ガッティ村に残るヒンドゥー寺院は、現在、地元のスラム教徒の名家の管理下にある。周辺にはもはやヒンドゥー教徒はいない。しかし重要な祭礼に際し、パキスタン国内だけでなくインド側からも巡礼が訪れるという。寺院を管理するイスラム教徒の一家は、郡役所と連携して巡礼者に保護と便宜を提供している。

ちなみに「チッティ・ガッティ」とは【白い石】の意であり、リングを指し示すことが、地元のスラム教徒にも認識され



チッティ・ガッティの【白い石】(リング)

ている。しかし忌避され名称を変更されたり、寺院やリングが「偶像」として破壊されたりすることはない。

真摯に向き合う

この国で、異なる宗教やその文化遺産に敬意を抱き、保護しようとする姿勢は、一部の市井の人びとにだけ見られるものではない。昨年(二〇一六年)五月、パキスタンで出土した黄金製容器に収められた仏舍利が、約一カ月にわたって仏教国スリランカに招来された。これは世界遺産タキシラの一角、ダルマラー

ジカ遺跡のストゥーパから出土したものである。スリランカは、文化大臣だけでなく高位の仏教僧も含む代表団を派遣、儀式を執りおこなって招来された仏舍利はコロンプ近郊の仏教寺院に安置され、多数の敬虔な仏教徒が参詣した。つまり完全に宗教的な対象、聖遺物として扱ったのである。



タキシラ博物館に展示されている仏舍利容器(右)

一方パキスタン側は、タキシラ博物館の学芸員を、保護管理者として同行させた。もちろん普段は、博物館のケース内に展示されており、あくまで考古・美術資料としての扱いである。もう数百年に渡ってパキスタンの地に仏教徒は絶えて久し

く、仏舍利を自らの信仰に則って神聖視するものはいない。しかし、それを考古・美術資料としてだけ扱うことを他者に強めない。両義的であることを認め、異なる集団・社会の要請に真摯に応えているのである。筆者は

たまたま、スリランカの代表団の訪問中にパキスタンにおり、

大臣を筆頭に考古・博物館局長からスタッフまでパキスタン側が精力的に対応している様子をつぶさに見る機会があったので強く印象づけられた。「我々は自身の信仰に真摯だからこそ、異なる宗教に対してはその信仰心を尊重し真摯に対応する」という共同研究者——英国で学位を取得した考古学者であり同時に敬虔なイスラム教徒でもある——の言を聞いたとき、果たして、欧米や日本の政府、博物館、研究者らは同じような対応を取ることができるのかどうか、と考えた。

今日、文化遺産の保護や管理は学術的にも技術的にもどんどん進歩しているとわたしたちは考えるが、対象とどのように向き合い、受け止めるのか、またそれを媒介として他者とのような関係を築き得るのか、あらためて根本的な部分を問い直されているような気がした。その答えを、追い続けてみたいと思う。

「刺し子」によるモダンからの脱却

蘆田 裕史 あした ひろし
京都精華大学専任講師



zaziqo 2017年春夏コレクションより。撮影・吉川周作

近代ファッションの歴史は大量生産、大量消費とともにあり、その速度は増すばかりである。そこに「手芸」をもちこむことは、新しい風を吹き込むことになるのだろうか。

zaziqo (ザジコ) というファッションブランドがある。カラフルな色彩とポップな柄が特徴的な zaziqo の服は、一見するときわめて現代的にも見えるが、そこには並大抵でない量の手仕事が含まれている。デザイナーの清水えり子が一針一針手でステッチを入れ、デザイナー自身はそれを「刺し子」とよんでいる——、あえて手仕事の痕跡を残す意味はどこにあるのだろうか。

より多く、より安く

近代以降のファッションの歴史は、量産化と価格の引き下げを推し進めるものとして考えることができる。一九世紀前半までは顧客と仕立屋が相談しながら服を作るのが一般的だったが、一八五八年に自身のブランドを設立したイギリス人ファッションデザイナーのチャールズ・フレデリック・

ワースがオートクチュールのシステムを考案したといわれる。それは、デザイナーが先にサンプルを作り、顧客に提示し、注文をとるといったものであった(ついでにいえば、そのときに生きた人間に服を着せて歩かせるファッションショーも考案された)。そうしてシーズン毎に新作を発表するコレクションというシステムも生まれることになる。

毎シーズン新しい流行が作られることは、流行のサイクルが加速されることにつながる。すると、社会学者のゲオルク・ジンメルが指摘するように、より安価なものが求められるようになる。というのも、上流階級に属するものでさえ、商品が安価でなければ次々に流行を変えることができなくなるためである。そう考えるならば、戦後ほどなくしてオートクチュールがプレタポル

テに取って代わられるのも首肯できるだろう。オートクチュールからプレタポルテへの移行は、単に仕立て服が既製服になったというよりもむしろ、量産化による価格の引き下げがその特質だと考えられる。

一度転がり始めた石はなかなか止まることがない。今度はプレタポルテのなかでもセカンドラインやディフュージョンラインとよばれる、同じブランドの「より安い」ラインが作られることになり、さらにはファストファッションが隆盛するのも当然だろう。



zazi 2015年秋冬コレクションより。撮影・Rie Amano、モデル・さくちゆみこ

う。現在のファッション業界の状況は、ワースがオートクチュールを生み出したときに既に宿命づけられていたのだといえる。

新しさを求める近代ファッション

コレクションというシステムは常に新しさを求める。いってみればそれはモダニズムに囚われた価値観である。詩人のシャルル・ボードレーはモダニティ、つまりいま。この新しさを肯定したが、「今」はすぐに過ぎ去り過去となるため、新しさが永遠に続くことはない。つまり、常に新しさを求めるファッションの世界は今なおモダンの世界を生きているといえる。そこから脱却するにはどうすれば良いのか。そのひとつとして、先に述べた「量産化と価格の引き下げ」に抗うことが考えられるだろう。

一方で、ファッションの歴史はファッションの民主化と見ることもできる。安価な商品の供給によって、大衆がおしゃれを楽しむ

むことができるようになったのも事実である。量産化と価格の引き下げに安易に反対したところで、その民主化に逆行してしまうことになる。

モダンからの脱却

zaziqo の清水が服に施す刺し子は、本来の刺し子のように実用的な意味があるわけではない。あるいは、近年よくいわれるような手仕事の温かみを感じるようなものでもない。しばしばアイテムの全面に刺し子を施す清水の行為は、むしろ何かに取り憑かれたかのような様相をもつ。彼女が対峙しているのは近代ファッションの歴史そのものであり、針と糸でそれを乗り越えようとしているのである。手仕事による制作は、一見プレモダンへの回帰に見えるかもしれないが、そこにこそファッションがモダンから脱却する可能性があるのかもしれない。



zazi 2015年秋冬コレクションより。zaziqoは2016年秋冬コレクションまではzaziのブランド名で活動をおこなっていた。撮影・Rie Amano、モデル・さくちゆみこ



zaziqo 2017年春夏コレクションより。撮影・吉川周作

女性の名前に込める次世代への願い



What's in a name?

やまだ ようへい
山田 洋平

東京外国語大学博士後期課程

モンゴル人の友達から「わたしに日本の名前を付けてよ」とせがまれることがある。わたし自身もモンゴル文化圏でモンゴル名を授けられることがあるので、「名前を付けたい」「付けられたい」気持ちはよくわかる。それでもモンゴル人はモンゴル人らしい名前を名乗ったほうが良いのではないかと考えてしまう。それはわたしのモンゴル文化を尊重する気持ちか、それともどこかにある排他的な気質か、名前を付けるということを重ね考えすぎなのか、よくわからない。「勇者」「花」などモンゴル人によく見る名前は、日本語に直訳するという方法もある。この方法がうまくいかない場合には、名前に願いを込めて、字画を考えて、響きを確認かめ、と「仕事になる。それとももっと気楽にひょい」と名付けるべきなのだろうか。

モンゴルでは、魔を除ける意味合いから「名無し」「人でなし」のような名前を付ける習慣があるということが知られている。一瞬眉をひそめてしまうような名前だが、どんな名前にも込められた願いがあることを思うと奥が深い。「61」「70」といった数字を名前とするモンゴル人もいるが、これは彼が生まれたときの祖父の年齢なのだという。脈々と受け継がれてきたモンゴルの人びとの縦の繋がり^{つながり}を、こうした名付けに強く感じる。ダゴラという女性と出会ったのは、内モンゴル滞在中のことであった。日本への留学^{りゅうがく}を控えているということで、妹の伝手^{ついで}で数少ない日本人であるわたしを見付け出したのだという。彼女は笑い話として、パスポート

を取得したら姓名わけられてしまったというエピソードを教えてください。モンゴル人にも氏族名の類はあるが、わたしたちのいう苗字のようによく使うものではない。パスポート取得の際には漢人の習慣にしたがって姓名をしるす必要があるが、そこでひとつのはずの名前ノオンダゴラが、姓ノオン、名ダゴラと切られてしまったという話。わたしはこのとき初めて彼女の本名がノオンダゴラで、ダゴラというのは通称であるということを知った。

ノオンとは「男の子」の意、ダゴラは「連れて来る」という動詞の命令形だから「連れて来い」、つまり彼女の名前は「男の子を連れて来い」「次は男の子が付いてきますように」という願いが込められているのである。よくよく観察すると、内モンゴル地域では類例「息子」を連れて来い」「弟よ来い」「弟を招け」のような名前の女性とよく出会う。動詞の命令形が名前に入っているというのは、なんともストレートな、強い願いなんだなと感じさせる。ダゴラのように、「男の子」の意味の部分^{ぶぶん}を嫌って普段は通称を名乗っているというケースも多々ある。

女の子に勇ましい「鷹^{たか}」と付けたり、「息子」という語を加えたり、なんていう名前とも出会うことがある。「男の子だったら良かったのに」という否定的な名前と見ることもできるが、次なる世代への願いが込められた希望^{あゆ}溢れる名前ともとれる。名前に込める願いにもいろいろな形があるのだと改めて思っ。

編集後記

今号は、1月号恒例の干支特集で、今年は「とり」をテーマとしている。「月刊みんなぱく」の干支特集としては12回目となり、干支の動物をひとまわりすることができた。小生は南太平洋のフィジーに毎年のように足を運んでいるが、鳥といって頭に浮かぶのは、フィジー語の「鶏のお使い」という表現だ。この慣用句は、買い物や伝言などのお使いが、てきばきできないことや、できない人を意味している。個人的にも、往復徒歩10分圏のストアまでの買い物に4時間かけた人と同居していたことがあった。暁鶏ぎょうけいの刻に朝食のための買い物リストを渡すと、間違いなく昼過ぎのおやつとして届くことになった。日本語では、俗にいう「鳥頭」が、似た言い回しとなるか。ただし「鶏のお使い」は、落語に登場するような、どこか憎めない、ちょっととぼけてのんびりした人物に使われることが多い印象がある。

くしくも、酉年とりから編集長を引き受けることとなった。「鶏のお使い」や「鳥頭」とならないよう、みなさまからのご指導ご鞭撻を請いたい。(丹羽典生)

みんなぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にぐわえ、『月刊みんなぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんなぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんなぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんなぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

- 表紙：上) ニワトリの置物 地域：ポルトガル H0151396
中央) 水入れ容器 地域：アメリカ合衆国 H0074886
下) ニワトリの置物 地域：ポルトガル H0150197

次号の予告

特集

災害を越えて(仮)

月刊みんなぱく 2017年1月号

第41巻第1号通巻第472号 2017年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 丹羽典生(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。

みんなぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんなぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>



みんなのほくぶつかん みんぱく

MINPAKU

「とり」を探して展示場めぐり。

年末年始展示イベント「とり」が本館ナビひろばで開催中です（1月24日（火）まで）。みんなぱくの「とり」にまつわる資料を4つのカテゴリにわけて展示しています。

本館展示場にも、仮面や彫像、羽根をあしらった頭飾りはもちろん、「とり」資料はまだまだまだたくさんあります。例えば、イランの礼拝用じゅうたんにはいくつもの鳥の図柄が織り込まれていますし、ボツワナのビーズの首飾りはダチョウの卵の殻で作られています。さらにカザフスタンのイヌワシを使った狩りの衣装や、イヌワシ用の目隠し頭巾など、「とり」をテーマに展示場をめぐれば、各地の人と鳥類とのかかわりが浮かび上がってきます。

どんな資料が展示されているか知りたくなったら、「とり」展会場に設置されているタッチパネル端末で調べてみてください。気に入った資料を見つけたら、「Good」



「みんなぱくでバードウォッチング!」の参加記念品は、「とり」資料写真の缶バッジ型マグネットです。全5種類のうち1点をプレゼントします（写真はイメージです）

展示場の「とり」がわかるタッチパネル端末。どこに展示されているかもわかります。人気ランキングは、本館フェイスブックページで発表しています。予定です



ボタンを押して投票しましょう。

1月9日（月・祝）には、「とり」展の関連イベント「みんなぱくでバードウォッチング!」が開催されます。マップをもとに「とり」を探して本館展示場を歩き、クイズに答えると、記念品がもらえます（先着350名様）。新年は「とり」を探しにみんなぱくにお越しください。